

を見て、やっと日本に帰って来たと安心した。上陸手続などを経て十月六日、やっと我が家に落着いた。

## 思い出の記

岩手県 川上 仁

(旧姓 出羽)

昭和二十年ころ、私は衛生兵としてチチハル陸軍病院所属の兵であった。

そのころの日本軍の戦況は、日に日に悪くなり、傷病兵の数は夥しく、チチハルまでの輸送が困難であり、座して待つよりはと、緊急の処置としてハルビン陸軍病院へ一部の兵隊を転出させることになり、軍用列車を編成し出発することになったのである。

そのころ満州国内には、不穏の兆しありとの風説もあり、軍部でも何らかの対策を立て万全を期さなければならなくなり、まず列車運行に危害を及ぼすやも、と疑われる満人の襲撃を防ぐための決死隊を編成する必要があり、人選にかかり、発表することとなったの

である。

やがて発表となり、読み上げの氏名の中に私の名前があったのに驚いた。鉄砲の取扱も知らない者になんたることと思っても「できません」とは言えませんでした。

ところが、「オイ、出羽二等兵、その役を俺にやらせてくれ」と言う兵が私の前に立っていたのだ。「上等兵殿、どうしてですか」と聞くと、こういうことであつた。

お前のような二等兵に決死隊となられては、〇〇上等兵の面子が立たないからだというのが理由のようであつた。

「決定されたものを勝手に変えたら自分が罰せられませんか」と念のため確かめてみると、「大丈夫だ、上官には了解を得ているから」とのことだ、「よろしくお願いします」と敬礼して別れ助かったが、悪いことをしたと複雑な思いであつた。

それから一路ハルビンへと列車が進む。列車の中の緊張が長い間続いたのだったが、幸い何事もなくハル

ピン駅に無事到着。それが昭和二十年八月十五日、終戦の日であったのである。

駅より眺めるハルビン市街は大きく立派なものだと感心していると、「ここに集結している兵に告ぐ、ただいまより持参している軍隊手帳を持参せよ」とのことであった。今ごろ何で、とは思いながらも兵の行く方へと近づくと、そこには軍隊手帳が積み上げられてあった。

しばらくの間の沈黙であったが、「これより軍隊手帳を焼却する」の一声があっただけであった。やがて手帳に火を放つ。軍人としての身分を証明するものが今、灰になると思うと涙が出てくる。肌身離さず身につけていたもの、軍隊手帳を灰にしてしまうとは。これは、我らに日本軍人ではないという証として知らしめるためだったのか。

とにかく日本は戦いに破れ、無条件降伏し、ソ連軍の支配下に入るので直ちに武装解除となり、銃は勿論、帯剣、銃、ナイフ等、一切刃物は持つべからずであった。

それからはすべてソ連兵の指示で行動することとなったのである。ソ連の兵隊は日に日に増えてくる。言葉が分からないのには閉口する。これが私らのハルビンにおける状態であったのだが、これから先の事となると、皆目見当がつかないので不安であった。

やがて収容先は満鉄の建物と決定のようだったが、その満鉄建物とはどこなのか、重い足どりで足元に目を落として、ただ黙々と歩む姿を今思い出してみると、なんとも情けないものであったと思うばかりである。

その時は茫然自失の態であったので記憶になく、どういう状態だったか今も思い出すことができないのだ。

あるいは自暴自棄に陥っていたのかもしれない。しかし、そんな中でも命ぜられたことはやらざるを得ない立場にあるのだが、考えてみたら、ソ連という国では、自国の都合の悪いときは、仲良くしようと言わんばかりの不可侵条約締結などという事にしておき、日本が敗色濃いとなったら、日本は先に日独伊三国同盟を結んでいるから、との理由で満州国に入り込んで来るような考え方なので、日本としては理解できないの

だが、勝てば官軍、負けると賊軍のたとえのあるごとく、今更何言う、で終わるより致し方なしであった。そのためもあるのか、本腰入れて作業ができないのであった。怪我をしては元も子もなくなるからと、まず安全を心がける作業であった。

それにしても、満州の空き家はすべて解体し貨車への積み込み作業で、重労働ではなかった。それほどソ連では燃料に困っているとは思われないが、最後は鉄道のレールも枕木も積んで行くのには驚きであった。

とにかく、作業場所は北へ北へと移動し、その果てはシベリアへ行かざるを得ないようになっていたのだ。何度も聞く「ダモイ」の話で貨物列車に詰め込まれ、長い日数を動物運搬同様の扱いで北へ運ばれるのであったが、今度だけはダモイであってくれと願いながら苦しい貨車暮らしにも耐えて来たものの、生理現象はどうしてもとまらないので貨車の扉を少し開けて放水してみるが、体が動くこと失敗する。いろいろ考えたのだが、厚紙があればV形に折り扉の間に挟み用を済ませはしていたが、大の方はどうもならないので、

見回りのソ連兵に話を聞いてもらおうと、よく分かるので責任者に聞いてから方法をということで帰った。直ぐ返事がなかったが三十分したら来てくれて、そのことについては条件があると言うのであった。

一、貨車から降りたら背を貨車に付けていること  
一、排便はその場ですること

一、その場所からは一歩も前に出ないこと  
以上の条件付きなので、日本の兵が一列に線路上に並び用を足している様子は、他人が眺めたらさぞや奇妙な光景であつたらう。

ところがどうしたことか、一人が前方の叢へ向かって駆け出してしまったのだ。考えられない行動を取ったものである。監視のソ連兵が、大声を上げてロシア語で叫ぶので、何で叫ばれたのかわからないようで振り向いた瞬間、ソ連兵の自動小銃の音が響くと同時に駆け出した兵はのけぞって斃れてしまった。これは一瞬の出来事だった。夢でありたかったが目の悲しい出来事で、今でも思い出される。監視の兵は逃亡者として射殺したのだろうか、なぜあの男が皆と一緒に排

便できなかったか、不思議でならない一つの出来事だった。

それでも貨車の旅は続く。人間は閉じ込められると、小さな窓でも外界を見たくなるものなので、貨車の窓にはだれかが必ず立っているのだった。

あるとき、窓から外の様子を見ていた者が大きい声で「オーイ変だぞ、外の景色が今までと違うようだぞ」と言うのだ。本当か、どれどれと寄って見ると、確かに民家の形も変わっている。電柱も低い。一体ここはどこだと考え込んだ。

そんなこととは関係なく、黒い煙を吹き上げて貨車は前進。また「だめか」と諦めていると、「オーイ日本人だ、手を振っている」と喜びの声だが、「ここは日本ではないはずだ、それなのに日本人がいるわけがないよな、どういうことかよく考えて見ようや、これはソ連で先に捕虜となって入国した兵隊だろう、また送られて来たのか、御苦労様との挨拶なんだよ、おそらく」と。

「ダモイ」だなぞとうまいこと言って、よくも自分

らのレールに乗ってくれたもんだ、と気付いた時は遅い。やがて下車の知らせだったが、駅ではなく野原で、日本兵はこれから目的地まで歩くんだとのこと。何時間歩いたか、工場らしい所に到着。

よく見れば、煉瓦工場の窯場。日本兵は今晚はここに泊ることなんだそうだが、寒い風の入る窯場でどうして寝られるか考えても見てくれよ。仕様がな、背中合わせでもして寝るとするかと思つたものの眠れない一夜を過ごす。その一夜の宿賃は、二カ月もの露天掘りの粘土運搬作業で返すことになった。雨が降っても休みなし、トロッコも満足でないシロモノで苦勞する、話にならない。

だが、煉瓦の素材作りだけの作業のため、乾燥釜入れ、火入れは私たちの仕事でなくお役御免ということで、別作業で農場行き。馬鈴薯掘り作業ということだから、大したことはないものと思つたが、畑の畝の長いのに驚く。考えただけで気が遠くなる思い。それも一個たりとも残すなど監視人は言うけれど、正直なら「できません」と言いたいところ、一日中見ているわ

けでもないはず、後は適当にやることとして始めてみて、大変な仕事であると知らされた。

とにかく時間が来ればソ連兵が引き取りに来て連れて帰るのだ。それが兵の役目であるらしいが、農場の方ではノルマを計算し、文句は後からついて来るのだ。

### 【執筆者の紹介】

現住所 岩手県遠野市六日町九一—三

生年月日 明治四十五年七月二十四日

入 隊 昭和十九年十月十四日

ハルビン陸軍病院

入 ソ 昭和二十年十月

抑留地 クイブシェフカ

帰国年月日 昭和二十三年十一月二日

(岩手県 菊池 隆)

### 次世代へのメッセージ

(戦後五〇年に想う)

岩手県 川口 純二

昭和十八年徴兵検査で甲種合格、鉄道兵第十番と徴兵官の通達を受けて、満州国関東軍牡丹江第六六八部隊鉄道第四連隊に入隊したのは、日本の敗色濃い十九年一月十日。小生二十一歳であった。鉄道第四連隊で鉄道兵としての基本教練(第一期)約六カ月を終え、いよいよ鉄道兵として各員はそれぞれ特技教育に入った。私は鉄道全般の教育を受けるため、原隊において激しい特訓を受けた。

「鉄道兵は、普通の戦友以上に固い絆で結ばれており、裏方役を務めるだけあって、仲間同士の連帯意識は強かった」

昭和十九年後半〜二十年初冬にかけて戦況も急を告げていた。約七〜八カ月間の連隊での特技訓練も高度